学校教育目標

夢・命・絆

夢 に向かっていく生徒
命 を大切にする生徒
絆 を互いに深め合う生徒

須和田が丘

令和３年度
学校だより　Ｎｏ．26
令和４年１月１２ 日

市川市立第二中学校
校 長　　石田 清彦

ホームページ　http://www.dai2-tyu.ichikawa-school.ed.jp/

生徒会本部の主体的な活動

12 月 24 日に生徒会本部主催によるクリスマスイベントが開催され、吹奏楽部の演奏会と、電飾の点灯式が行われました。

「壁のない空間で、イベントならではの空気をともに感じ、全校生徒の絆を深める」ことを目的としたイベントは、生徒会本部の発案であり、そのための「飾り」集めから、当日の準備、注意事項の検討等まで、多くの生徒の協力を得ながら、自分たちの力で開催へ繋げました。

また 12 月の職員会議では、生徒会長と副会長が冒頭部分に出席し、昼休みのトランプ使用とイエローリボン活動について提案をしました。昼休みのトランプ使用については、生徒総会の生活要望として挙げられており、試行期間を経て生徒会本部で運用の形を検討して、今回の提案となったものです。

提案では、外遊びへの影響を考えて、各クラスへ配付するトランプを 4 つから 1 つにしたり、多くの生徒が利用できるように予約制にしたりするなど、消毒や時間厳守のルールも含めて、様々な視点から検討されてきたことが分かりました。

職員会議では、教職員から別の視点での質問があり、さらに具体的な検討を行って、より良い運用方策につなげていくこととなりました。

このような取り組みは生徒の主体性を伸ばし、自己有用感の向上に結び付いていくものと期待しています。

国立教育政策研究所の生徒指導リーフに、「『褒めて（ 自信を持たせて ）育てる」という発想よりも、『認められて（ 自信を持って ）育つ』という発想の方が、子供の自信が持続しやすい。」という記事がありました。「褒めること」と「認めること」はどう違うのでしょうか。以下に掲載いたします。

「褒めること」と「認めること」の違いは？

大人の側にしてみれば、この両者の違いはあってないようなものでしょう。「認めてあげようと思って、褒めている」「褒めることは、そのまま認めること」という感覚なのではないでしょうか。そして、多くの子供も、そんな感じで受け止めていることでしょう。とりわけ、年齢が低いほど、その差はないに等しいに違いありません。

しかし、「認めてほしい」「認めてもらいたい」と強く思っている子供には、そんな大人の言い分は通じないかも知れません。中には、「褒められてもうれしくない」といった子供も出てきたりするのです。一体、何が違うのでしょうか。

大人が子供を「褒める」ときは、一般に大人の基準や水準で「褒める」ことが多いように思われます。そして、大人の側の基準で一定の水準に達した、水準を超えたと評価するのが「褒める」という行為と言えます。反対に言えば、水準に達しない場合には「頑張りなさい」と叱咤激励することはあっても、褒めることは稀でしょう。

それに対して、子供が「認めてもらいたい」ときというのは、一般に子供の基準や水準で「褒められたい」のではないでしょうか。子供なりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを「認められたい」のです。だから、大人の考えた基準に達していなくとも「褒めてほしい」と考えたり、大人の考えた水準に到達して「褒められた」場合でさえ、大人の基準とは異なる子供の基準でも「褒めてほしい」と考えたりするわけです。

だから、自分がさほど努力もしていない、自分の功績ではないことを、「みなさん、よく頑張りましたね」と全員を一括りにして褒められても、さほどうれしくもなく、励みにもならないのかも知れません。子供の実際の行動と向き合うことなく、表面的にお世辞を言ったり、ちやほやしたりしても、子供の「自己有用感」はおろか、「自尊感情」すら高めない可能性が高いのです。

行事に取り組む、学習に取り組む際などに、子供自身に目標や工夫する点、努力する点などを考えさせておき、その基準に沿ってどこまで達成できたのかを評価することが「認める」という行為では重要になります。それが、「自己有用感」を育むのです。単に良かった・悪かったと評価するだけの「褒める」では、「自尊感情」を育むことはできても、「自己有用感」を育むことにはなりにくいのです。